高齢者の豊かな生活のために　　２０２１年１月１日発行

手 賀 沼 通 信（第２７４号）

Ｅメール：nittay@jcom.home.ne.jp　http://ynitta.cocolog-nifty.com/blog/　新田良昭
http://jfn.josuikai.net/semi/koyukai　http://tegatu2.web.fc2.com

あけましておめでとうございます
ことしもよろしくおねがいいたします

手賀沼通信に投稿いただいた記事をきっかけに素敵な交流が生まれました。

新年号にふさわしい内容と思いますのでご紹介いたします。６ページに拡張しております。

１７８歳の若々しい交流の物語

１．登場人物と交流の始まり

この物語の主人公は９３歳の田中通義様と８５歳の大野耕一様です。

田中様は手賀沼通信の昨年の８月号に「キンドルで本を読む脳トレ」を投稿くださいました。千葉県野田市にお住まいで、簡単な現況は投稿文に書かれています。

大野様は昨年の９月号に「私の終活」を投稿くださいました。神奈川県平塚市にお住まいで、自分の経歴や現況をそこで詳しく述べられています。

お二人は今まではお互いに知らない同士です。共通したことといえばお二人とも古くからの手賀沼通信の読者ということです。

交流の始まりは、田中様が大野様の「私の終活」を読んで、下記のメールを送ってこられたことから始まりました。

「新田良昭　様
270 号の記載内容、大変興味深く拝読しました。
大野耕一様の「人生の終活」は見事に整理、詳述されており、はて、私の場合はどの様に当てはまるかを逐一考察、対象させていただきました。
此処に僭越ながら添付いたします。出来ましたら、大野様へ転送いただければ幸いに思います。」

（添付レター）大野さんの終活と対比して書かれていましたが、ページ数の関係で大野さんの終活は省略しました。9 月号に載っています。

私の終活　　田中通義　９３歳

今年２月に９３歳を迎え、未だ元気にしております。唯一残念なのは、家内が１２年前に他界し長男と二人暮らし。長男は精神的病を持ち毎日デーケアの為一人で病院通いです。

活動の総括

（１）講師

現役時代には思いもよらなかった講師、千葉県生涯大学校普通科で「成熟社会と高齢者の学習課題」と「生きがいと生涯学習」のテェーマで、9 年間務めた。
現役時代に築いた英語力をかりて、野田市職業訓練センターで英語の講師 20 年間務めるも、令和元年 9 月をもって終了。

（２）旅行

現役時代の仕事の関係で、ニューヨーク、シカゴ、ドイツ・フランクフルト、フランス・パリ、オーストラリア・シドニー、台湾、香港へ出張するものの、大野さんの様な優雅な旅は出来なかった。唯一出来たのは、退職記念として家内とオーストラリアへ観光旅行をした程度であった。

定年後は唯一、家内と親戚仲間で函館、小樽運河への旅程度である。93 歳を過ぎた今では、長距離旅行は出来なくなった、残念至極。

（３）　クルマの運転

昭和 56 年、54 歳で免許を取得、注意をしながら現在も利用している。事故が無いよう、唯々神に祈るのみである。免許切り替え時に行う高齢者運転指導では、特別な指導・注意は受けていない。

（４）　男声合唱

加齢とともに思い通りの音色が出ない。機会あるごとに合唱グループに参加しようと思っていたが、実現していない。唯一、朝の数分の読経では、力いっぱい大きな声を出すよう努めている。

（５）　俳句

羨ましい限り、全ての機会を見過ごしてしまった。元々センスが無いのかもしれない。

（６）　水彩画

私は水彩画を心得てはいませんが、40 歳の頃、太平

洋画会の高橋先生から油絵を 4 年間ほど習いました。38 歳の頃一過性の高血圧症で会社執務中に倒れ、芝の慈恵医大病院へ担ぎ込まれ、仕事での過労と診断されました。以降、油彩を始め、赤坂のアメリア大使館、鎌倉最古の杉本寺等を描きました。この頃の油彩は現在の住処に飾っています。65 歳の定年後は写真撮影に興味を抱き、東京新宿にあった「写壇太陽」の井上清司先生の指導の下、上野の東京都美術館に於いて開催された新院展に 4 回ほど入選するまでになりました。凝り性の私は、この頃自宅でカラー写真の現像をするまでになりました。

（7）ボランティア

平成 7 年、阪神淡路大震災の後を受けて、野田市が主催した生涯学習・ボランティア養成講座終了者が設立した「ほのぼの会」の初代会長を 4 年間引き受け、生涯学習とボランティア活動を推進してきました。現在ではもっぱら小学校を対象に、「車椅子の扱い方」並びに「目隠し歩行」の実務を、野田市社会福祉協議会と共に指導し、この会は令和 3 年には設立 25 周年を迎えることになりました。私は加齢の為ボランティア活動には参加できませんが、24 年間休むことなく、月例会には参加しております。

２．モノの終活

（1）書籍

活字の本が読めなくなった。１時間もすると活字がぼやける。しかしテレビ、パソコンでは、余り目の疲れは感じない。そこで思い付いたのはアマゾンのキンドルでの読書である。その特徴は

1 画面の明るさを読む場所に従って自動調整してくれる。

2 画面上の文字、日本語、英語、共に拡大・縮小が素早く出来る。

3 紙の本の様に蔵書場所を必要としない。

4 本の価格が紙本より２割程度安い。

5 読みたい本を新聞、インターネットなどで検索、アマゾンから購入、即座に読むことができる。

6 多くの本を収納でき、持ち運びに便利である。

7 端末、ペーパーホワイトは比較的廉価、
１万４千円程度で手ごろである。

（2）レコード

一時期シャンソンにこって集めたが、今ではすっかり興味が無くなりました。しかし思い出せば５０歳の頃、パリへの出張時に２～３枚購入したことがある。レコードを試聴したいからかけてくれ、と頼んだところ、無残にも NO と断られ、国情の違いを認識させられました。

（3）ビデオテープ

使った記憶すらありません。

（4）ＣＤ（コンパクト・ディスク）

ビル・クリントン、ヒラリー・クリントンなどの伝記ものディスクを睡眠時にかけ、英語の学習に資したことはありますが、他にはほとんど使用していません。

（5）写真（アルバム）

50 歳から 70 歳ごろまで、写真クラブに所属していて、カメラ、レンズ、カラー現像機材等に 200 万円程投資した結果、現在その処分に困窮しています。アルバムの整理は恐らく死ぬまで放置するでしょう。現在自叙伝・後編を書いていますが、写真を見ることで、過去の多くの思い出に繋がります。

（6）日記帳・手帳

日記は殆ど書いておりません。しかし戦中陸軍少年飛行兵学校在校時に書いた「反省録」は貴重な日記として、一部が残っています。2 年半にわたる記録ですが残念、多くのものは戦災により焼失しました。

戦後何度となく書こうとしましたが、継続できなかったのが現状です。

写真も日記と同様に過去を知る重要な資料となりますので活用できるでしょう。

（7）教育に使った手製教材と「ほのぼの会」生涯学習とボランティアの会の資料。

千葉県生涯大学校（6 学園「銚子、茂原、館山、千葉、松戸、流山」）で 9 年間「平成 18 年～平成 27 年」にわたるパワーポイントでの教材と、野田地域職業訓練センターでの 20 年間「1899 年～2019 年」に及んだパワーポイントでの英語の授業、共に貴重な私の財産として保存しています。おそらく将来使用することは無いと思いますが、廃棄することも出来ず死ぬまで保存するでしょう。子孫が何らかの形で活用してくれれば、と思いますが、恐らく自然消滅でしょう。もう一つ、初代会長を 4 年間（平成 8 年～平成 12 年）務めた「ほのぼの会」資料、特に記念会誌、なども前述同様の経過をたどると思われます。

（7）　老い支度ノート（エンディングノート）

今年、私の 2 並びの誕生日「昭和 2 年 2 月 22 日生れ」、93 歳を祝して令和 2 年 2 月 22 日に昼食会を開催、自叙伝「風雪 93 年・前編（出生から５０歳）」を上梓、昼食会参加者 80 数名の方々に贈呈しました。新型コロナウイルス拡散が始まったばかりでしたが、幸いにも野田市・市長も参加してくれました。現在、後編「51 歳から 93 歳」までを書き綴っています。次の 2 並び 2022

年、95 歳の昼食誕生会で贈呈できるよう、頑張っています。
2 年前に子供たちを招き、遺産相続目録を配布。２～3 年中に公正証書にしたく計画中です。

３．心の終活

出生から回顧すれば様々なことが脳裏をかすめる。その一つには、神戸で生まれ、父の転職により川崎市中原区に転居し、飛行機の操縦を目指し軍隊に入り、当時の朝鮮に渡り、その後終戦。川崎に引き帰し、結婚後は東京・世田谷区・目黒区を経て、再度川崎へ。そして 50 歳の時、終の棲家を建て野田市川間へ移り住んで早くも 43 年を経て、93 歳になった。36 才の時父を、37 歳の時継母を、38 歳の時、一過性の高血圧で入院、以降父の志を継いで毎朝、般若心経を読経しています。

2 年後、2022 年の 2 並びの誕生日、95 歳を祝って自叙伝「風雪 93 年・後編」を出版し、前編同様、祝賀会に参加してくれる友知人に贈呈したく思います。

長く生きられたことを天に感謝、成仏する際には「思いついたことは全て試みた」と仏前で手を合わせられることを願っています。

田中様の終活を大野様に転送したところ、大野様から次のメールが届きました。

「新田さん、こんにちは。大野です。
田中様の「私の終活」に対して、私なりの感想を纏めてみました。
恐れ入りますが、転送していただけると有難いです。」

（添付レター）
田中様の「私の終活」について　　大野耕一

「私の終活」に対比して、田中様はご自身の「私の終活」をお書きくださいました。有難うございました。

私より８歳も年上ですが、いま現在、こうしてきめ細かく資料に基づき、過去の履歴を記述されていることに、まず驚嘆いたしました。現役時代のお仕事は存じ上げませんが、定年退職後の生涯大学校や職業訓練センターでの講師経験も土台になっているのでしょう。

９３歳でクルマを運転されていることにも、驚きました。いま現在、必要性を感じていらっしゃるのでしょうか。事故がないよう、お気をつけください。

私の「水彩画」に対して、田中様は「油絵」や「写真」に興味を持たれていたようですね。「私の終活」にも書きましたが、こういう趣味を持つと心身ともにリフレッシュされ、至福の時が過ごせます。田中様のように、展覧会に出された作品が入選するようなことになれば、尚更のことでしょう。

活字の本が読めなくなったら、今度はアマゾンのキンドルで読書する、そのチャレンジ精神が田中様の考え方の根底にありますね。すばらしいことです。

写真（アルバム）については、私と同様、田中様もお困りのようですね。とくに田中様の場合、写真への投資は大変なものですから、これも尚更のことだと思います。

自叙伝については、私は自分史的俳文集として、２冊の手づくり本に纏めました。前編の『下町育ち』(A5 版、８４ページ）では、生まれ育った東京都中央区鉄砲洲での生活（学童疎開、寄席通い、地元の祭など）にいくつかのエピソードや俳句を添えてエッセイ風に纏めました。後編の『湘南暮し』(A5 版、１１２ページ）では、ヨーロッパ旅行、クラシック音楽、水彩画、俳句などの趣味を中心とした湘南での暮しぶりを描いています。

田中様も、令和２年には９３歳を祝して自叙伝『風雪９３年・前編（出生から５０歳)』を上梓され、来たるべき令和４年には『後編（５１歳から９３歳)』を９５歳の祝宴で配布できるように準備されているようです。ぜひ成就されることをお祈りいたします。

いろいろと教えていただき、有難うございました。重ねて、御礼申し上げます。

２．著書と読後感の交換がすすむ

この後、メールの交歓はお二人で直接交わされることになりました。お二人のメールはＣＣで私にも届きましたので、その後の経過を横から眺めながら楽しませてもらいました。

田中様より大野様へのメールです。

「大野耕一様
新田さん;先ずは、大野さんと私の「終活」に就いて、メールでの交信仲介有難うございました。
大野さん;度々のご意見有難うございます。(中略)
大野さんに読んで頂きたい私の拙い自叙伝「風雪 93 年・前編」を送付したく思いますので、ご住所をお知らせください。
先にも述べましたが、後編を現在執筆中で、2022 年 2 月を目指し出版予定です。年齢のせいか、思うように書けず苦闘中ですが、何か目的をもって日々生活で

きる喜びを感じ取っています。その合間にキンドルで、ミシェル・オバマ著の「becoming」を読んでおります。黒人であるが故の悩み、それを夫の大統領と共に過ごしたホワイトハウスでの諸々の出来事、二人の女の子への愛情、読み応えのある伝記です。もうすぐ完読です。」

田中通義著「風雪 93 年　前編」

大野様から田中様へのメールです。

「田中通義様、こんにちは。大野です。
自叙伝「風雪 93 年・前編」を、私のような者にもご送付いただけるとのこと、有難うございます。
なお、私からも、自分史的俳文集の前編「下町育ち」の在庫が1冊ありましたので、前編だけで恐縮ですが、ご送付いたします。手づくり本ですので、ちゃちなものですが、お受け取りいただけると有難いです。田中様のご住所をお聞かせくださるよう、よろしくお願いいたします。
田中様は、自叙伝の後編をご執筆中に、ミシェル・オバマ（ファースト・レディ）の「becoming」をお読みになっていらっしゃるとか。すばらしいことですね。恐れ入りました。ますますのご活躍を期待しております。」

大野耕一著「下町育ち」

そこでお互いの著作を送付し合いました。

まず大野様から田中様へ送られたメールです。

「田中通義 様、こんばんは。大野です。
『風雪９３年・前編』、楽しく読ませていただきました。
それにしても、すばらしい自叙伝ですね。私の感想を添付に纏めましたので、ご覧ください。
ご著書の中に貴兄が油絵をなさっていることが出ていましたので、私が８５歳記念に最近上梓した『水彩スケッチ画集』をお送りいたします。
休みが続くので、届くのはちょっと先になるかと思いますが、ご覧いただければ幸いです。」

大野耕一著「水彩スケッチ画集」

（添付レター）

『風雪９３年・前編』を読む　　大野耕一

素晴らしいご著書『風雪９３年・前編』を有難うございました。各章ごとに、感想を述べさせていただきます。

第１章（出生～１０歳）

出生から１０歳までの事柄が、何でこんなに鮮明に記憶されているのか、不思議でなりません。私自身のことを考えると、せいぜい小学校４年生の１０歳の頃のことを思い出すのが精一杯です。記録を残されていることがすばらしいです。

第２章（１１歳～２０歳）

学年で言うと、ちょうど小学校上級生、中学、高校あたりでしょうか。その頃、少年兵として活躍され、軍隊生活を送られていたなんて、今では考えられませんね。すごいことです。私は埼玉県の長瀞へ集団疎開に行っていたので、終戦のことだけは鮮明に覚えています。

第３章（２１歳～３０歳）

私たちが勤めていた頃は、一旦入社した会社には定年まで勤め上げるのが通例でしたが、貴兄はアメリカ仕込みのせいか、転職は苦にならなかったのですね。

それどころか、「アメリカ社会では、転職を常に一歩前進と捉える慣習がある」ということで、報酬も上がるし、前向きに考えていたようです。

労働組合の活動については、私にも苦い経験があります。日本アイ・ビー・エム（株）の藤沢工場に在籍していた時、労務課長であった私は、会社側の代表として総評系の組合との団体交渉に当たったことがあります。汚い言葉で罵倒され、稔りの少ない話し合いだったことを覚えています。

第４章（３１歳～４０歳）

冒頭のテニスの件は、私も若い頃テニスをやっていたので、興味深く拝見しました。宮城淳や加茂公成とクラブハウスの浴場で一緒に湯船に浸かった話や宮城邸でマージャンをした話などは、滅多に聞けるものではありません。

昭和３０年代には、ボウリングも一時ブームになりました。この頃私は山種証券に勤めていて関連会社に辰巳倉庫（株）があり、この会社が新宿西口に東京スターレーンというボウリング場を経営していたので、随分、通いました。自分でボウリング・ボールを持っていたほどです。ボウリング設備のブランズウィックという社名も、当時聞いたことがありました。

当時は所属ボウラーに岩上太郎がいてよくお会いしましたが、その頃活躍していた人には矢島純一、女子では須田開代子、中山律子などがおりました。懐かしい話です。

また、力道山と通産省、大蔵省などとの折衝の件を、よくあそこまで詳細に記述できたものかと感心しました。

第５章（４１歳～５０歳）

４０歳を過ぎた貴兄のアメリカの監査・会計会社「トウシュ・ロス・ベイリー・スマート」への転職が、戦後の１０回目の就職先になりました。ここでは仲間から“大将”と呼ばれて、気持ちよく仕事ができたようですね。

（以下45行分を紙面のページの都合で新田が勝手にカットさせていただきました。お詫びいたします）

「風雪」を広辞苑でひくと、「比喩的に、厳しい苦難」と出ています。『風雪９３年・前編』を読む限り、３０代、４０代にあまりにも多くの仕事をやり過ぎた感があります。それが厳しい苦難に通じているのかもしれません。それにしても一つ一つの事柄の、日時、場所、対象物、関係者（登場人物）、家族の状況などが鮮明に描かれているのは凄いですね。『前編』を読んだ感想を一言でいうと、「膨大な資料に基づき、綿密に記述されていて、貴兄の人生そのものが浮き彫りにされています。まさに、自叙伝のお手本のようなご著書」でした。有難うございました。

『風雪９３年・後編』を、今から楽しみにしています。

次に田中様から大野様へのメールです。

「**大野様**

メールありがとうございました。

大野様のメールを読むごとに、新たな事柄を吸収しています。

過日頂きました「下町育ち」興味深く拝読しました。

「水彩スケッチ画集」楽しみにしています。

私の感想文を添付いたします。

（添付レター）

大野　耕一　様　　田中　通義

大変涼しくなりましたが、今なお新型コロナウイルスの収束が見られず、思い通りの生活ができないもどかしさがあります。

大野様には如何お暮らしでしょうか。

私事ではありますが昨週、同年配（共に93歳）の二人があの世へ旅立ちました。一人は仙台に住む少年飛行兵学校の同期、もう一人は新潟に嫁いだ娘の義父です。新潟へ葬儀に行くか否で迷った挙句、年齢のせいと言い訳し、新潟行きを断念しました。ちょうどその時、着信したのが大野様のメールでした。私の自叙伝「風雪93年・前編」について、長文の論評と身に余るご好評を頂き、感謝の念で一杯です。今年 2 月の出版記念を祝う誕生会で公にした私の95歳（2022年）の誕生日に「後編」の上梓、改めて書かなくては、と喝が入りました。

順序が逆になりましたが、過日頂戴しました大野様の著書「下町育ち」、読み終えました。先ず自作の製本、日本の古史を模した表紙の色調、俳句の挿入と思い出深い写真の数々、一気に読み終えました。

１．学童疎開：

私と年齢が 8 歳程お若いと推察いたします。私にはない貴重な経験です。

２．寄席：

育った環境の違いでしょうか、優雅な生活、羨ましく思います。

３．頑張れ日本人力士：

国技館へは残念、この年齢まで行った経験がなく、テレビで観戦するのみ。今秋場所で白鵬、鶴竜の両横綱

休場と相まって新型コロナ禍、しかし待望されるのが大関朝乃山。9 月 21 日現在、緒戦の 3 連敗、残りを全勝、12 勝 3 敗で終わってほしい。そして待望の横綱を目指してくれることを。

４．雑誌「コッペ」のこと：

名門都立上野高校での「コッペ」の発刊。コッペパンをかじりながらの学習する表現でのネーミング。文学青年はここから始まったのでしょう。

５．鉄砲洲（てっぽうず）祭：

私も現在の自治会の夏祭りには数多く参加しましたが、あの祭り着は照れくさくて余り馴染みませんでした。

６．わたしの銀座：

30 歳代後半に 3 年半ほど銀座 5 丁目の小さなビルの 5 階事務所で働いたことがあります。ウイッグの製造・輸出会社。この頃、銀座の裏通りで馴染みのバーに通い、アフターファイブを楽しんだ。勿論会社の遊興費で、総務部に割り当てられた月額 15 万円程、部下１人を伴って月２～3 回、通ったものでした。今では確定できないが御幸通りの地下に在ったと思うが。ある日バーのマダムが国技館での相撲興行を見に行こうと私を誘った。総務・会計畑一途の私は費用を心配して体よく断った残念な思い出があります。

今後ともよろしくお願い致します。

続いて大野様の水彩画集について田中様から大野様に送られた感想文です。

（添付レター）

大野耕一様　　田中通義

過日頂戴しましたご著書「下町育ち」に加え、この度は大変立派な「水彩スケッチ画集」をご恵送いただき有難うございました。

多くのことに興味を持ち、ご健康で聡明な大野様には脱帽です。このエネルギーはどこから来るのでしょうか、羨ましい限りです。

多くの水彩スケッチの中から特に懐かしいのは、16 頁の「大倉山記念館（横浜）」の白塔です。戦後 2 年過ぎた頃、当時は「大倉山図書館」と呼んでいましたが、ここで 1 年間、神奈川県主催の「語学員養成講座」を受け、戦後私の生活進路が決まったように思える場所なんです。学費が無料で多くの学生がこの場で学びました、私もその中の一人でした。建物の裏には綱島に続く広い梅林があり、男女の学生の恋のささやきの場所でもありました。戦後間もない頃ゆえ、米兵も憩いを求めて図書館を訪れ、私達には実地の英会話学習の場でもありました。

23 頁の「紅葉の神奈川県庁（横浜）」。思い出します、幾度となくこの前の本町通り、近くに私が 3 年程勤めた、エバレット汽船（米国）のビルがありました。

29 頁には、あの有名なゴッホの「アルルの跳ね橋」。よくぞこの場所でスケッチを。私はドイツ、フランスへは会社の出張で夫々2 度ほど訪れましたが、仕事ゆえ、多くのものを見逃してしまいました。

私は一時、写真撮影と自宅でのカラー写真現像にこったことがあります。未だ家内も存命中、私が午前 10 時ごろから写真の引き伸ばしと現像に入ると、ほぼ終日、2 階の暗室に立てこもり没頭しました。ポジの水洗は 1 階のふろ場、この時には家内も見ていて、誉め言葉を貰った思い出があります。思うに、人があることに没頭すると、褒めてくれることが唯一の励みになったように思えます。誰でもいいのですが、身近な家内は一番の存在でしょうか。

大野様も奥様の誉め言葉に励まされ、趣味の領域が益々広がり、著述、俳句、そして絵画へと磨きがかかるのでは、と想像しますが。勝手な私の想像お許しください。

秋分も過ぎ涼しくなりました。末筆ながら大野様の益々のご活躍を切望しております。

９３歳と８５歳、合計１７８歳の若々しく奥行きの深い交流でした。お二人の年齢を感じさせない前向きの姿勢に感銘をうけています。最後にお二人からうれしいメールをいただきました。

大野様からのメールです。

「新田さん、こんばんは。大野です。
貴兄の『手賀沼通信』がご縁で、田中通義さんとメール交歓をしています。この歳になって93歳の方と友人になるなんて、思いもよりませんでした。
文章を通じてですが、田中さんとは何か心が通じ合うというか、お互いの気心が知れているような気がしています。
『手賀沼通信』の読者には、すばらしい方がいらっしゃいますね。有難うございました。」

田中様からのメールです。

「新田さん、大野さん
仲間入りさせていただいて感謝しています。
スムーズで心地よいコミュニケーション、お陰様で
若返りました。これで私の自叙伝「風雪 93 年・後編」の執筆に弾みがつくものと確信しています。
今後ともよろしくお願い致します。」